

幸府画報

第 14 号

2022 年 9 月
(令和 4 年)

発行
太宰府市教育委員会
文化財課



バックナンバーはこちらから

調査見聞

齋藤秋圃生誕250年特集(3) 秋月藩周辺における秋圃の受容

— 3枚の《菊慈童図》をたどって —

齋藤家資料中の《菊慈童図》

上半身をややひねり、右膝をたて、筆を握った右手を膝上において坐る人物が、軽やかな筆づかいで描かれています。ぼさぼさの髪やや間の離れた目、ふくよかな唇をしたあどけない顔つきのこの童子は、アンチエイジングの象徴・菊慈童です。

周の穆王に仕えていた慈童が、配流先の山で、帝から教わった経文を書いた菊葉の下露を飲んで長寿を得、後に魏の文帝に召し出されたという物語は、能の曲目となり、さかんに絵画化されました。『幸府画報』2号でも言及されたように秋圃はこの主題を得意としていたと思われる、齋藤家資料中の7枚と個人蔵の絹絵1幅が知られています。(図1)は齋藤家資料中の1枚ですが、今回はこれに絵馬と写し各1枚を加えた計3枚の菊慈童図から、秋圃の受容の一端をたどります。

朝倉市・大己貴神社の絵馬

(図2)は秋月藩14カ村の座土神であった大己貴神社の絵馬です。整理された構図と謹直な線が特徴の作品で、画面上方に「文化十〇〇」奉寄進の墨書、画面左下に「二宮〇兵衛」画面右下に「〇行写」の落款と白文方印(不



図 1



図 2



図 3

詳)があります。不鮮明ですが、落款の一文が目が「章」であれば、章行とも号した秋圃の作ということになります。秋圃最古の絵馬が文化11年(1814)の《街並図絵馬》(太宰府天満宮蔵)なので、本作品は秋月藩下の初期の絵馬として重要です。

朝倉市・品照寺に伝わる秋圃作品の写し

(図3)は朝倉市の品照寺に伝わる画稿です。滝の落ちる岩壁を背景に立つ童子は、左手に持つ筆の先端を口元につけ思案顔です。岩の描写や人物の輪郭線がややぎこちないため、描いたのは専門画家ではないと思われます。画面左下に「秋圃」の墨書と秋圃のものではない朱印(印文不詳)が押され、秋圃作品の写しであることが知られます。品照寺は旧秋月藩に隣接する三奈木黒田藩の真宗寺院で、所蔵文化財の中には当寺の僧覚円(1814?)をはじめ、僧侶や素人画家などが描いたと思われる画稿や俳画作品が数多くあります。この画稿は、秋月藩周辺に絵画を楽しむ場が成立し、そこで秋圃の絵が学習されていたことの証です。

絵画受容の場の広がり

不思議な魅力をたたえた秋圃の菊慈童が、画稿・絵馬・写しと様々な姿で立ち現われ、秋月藩周辺に絵画の受容の場を広げていったことがわかります。(小林知美)

【参考文献】

・小林知美「秋圃の受容環境―秋月藩周辺の社寺所蔵作品から」年報太宰府学14

- 図 1 部分図 紙本墨画 18.5 × 16.7 cm
- 図 2 部分図 板地着色 75 × 110 cm
- 図 3 部分図 紙本墨画 108.2 × 27.8 cm

メイショ

溝尻のえびすさま — 石像と掛軸 —

連歌屋方面から小鳥居小路に沿って続く溝が、藍染川と合流する辺りを溝尻といいます。江戸時代、太宰府天満宮の門前には宰府宿が置かれ、溝尻口を含めて宿場の出入口となる4つの構口が設けられていました。溝尻口付近は、主に甘木・朝倉方面からのさいふまいるの参拝客で賑わい、また齋藤秋圃も住まいした所です。秋圃の旧宅跡の斜向かいに建つえびす石像は、商売繁盛の神として、かつては8軒で構成される旧溝尻(錦之町)上組により祀られていました。12月3日のえびす祭りの早朝には、回り当番で供物の準備や参拝客へのふるまいが行われ、その後は他の組と同じように当番宅に皆が集まり直会が開かれました。

直会の会場には、えびす図の掛軸を掛けるならわしでしたが、この組のえびすさまを描いたのは、秋圃の手ほどきを受けた太宰府の絵師・萱島鶴栖(1827〜1878)でした。掛軸は「当番渡し」の際に、次の当番へ大切に引き継がれ、行事の折々に、地域の求めに応じてきた絵師たちの姿を今に伝えていきます。(井上理香)



※旧溝尻上組の祭祀道具一式は、現在文化ふれあい館に寄贈されています。



(右) 祭り当日のお接待(平成10年)
(左) 萱島鶴栖筆 《えびす図》

逸品探訪

大宰府の絵師に関連する逸品・名品を紹介いたします

吉嗣拜山作

【秋景山水図】

中国の巨匠にならった山水図

ゆるやかな山あいには人家や色づく木々が描かれた秋の風景。左端の家屋には外を眺める高士の姿が見えています。画面の破損が惜しまれますが、穏やかで気分よい山水図です。

吉嗣拜山自身による画賛には、「大癡道人の秋山晴翠図はすつきりした趣がありながら、山間に漂うもやのような空気が表現されている。真似して描いてみたものの、遠くそれには及ばない」と、拜山が大癡道人すなわち中国元時代の山水画の巨匠黄公望にならって描いたことが記されます。



絹本墨画淡彩 扁額装
35.7 × 64.0cm
慶応4年（1868）吉嗣家資料

〔賛文〕
大癡道人
秋山晴翠圖筆
意瀟灑浮嵐之
一変也故追擬
其意畫成遠甚
時戊辰仲夏
作於鴨沂小樓
拜山（印）

右手時代の希少作

賛の末尾には戊辰の仲夏、つまり慶応4年の5月に鴨沂小樓なる場所で作ったことが記されています。前年の慶応3年（1867）春に22歳で京に出た拜山は、同郷福岡（倉屋出身の中西耕石に入門し、慶応4年7月に新政府の吏員として倉敷県（岡山）に出仕しました。右手を失う大事故に遭うのは3年後、東京に転勤となった明治4年のことです。本作品は耕石門下時代、そして右手で描いた作として極めて希少な逸品なのです。

「拜山」と「拜山」

拜山の署名という点、手偏を「手」とする「拜」を用いて最終画を流れるようにのびず、やわらかで丸みある書風（図右）が思い浮かびますが、本作品では新字体の「拜」で、手偏の縦棒は右下に少し弧を描くように引いて強く跳ね、「山」もしっかりと筆圧をかけて書かれています（図左）。明らかに異なる書風の違いからは、持ち手が変わったことによる必然的な事情とともに、「左手拜山」として蘇った拜山の意識の変化も窺えます。さて、絵の作風はどのように変化したのかしなかったのか。それはこれから本格的に検討すべき課題です。（井形栄子）



（右）大正4年《書扁額》の署名
（左）本作品の署名

いちまい
画稿鑑賞

齋藤家資料 【三酸図】

大きな甕を取り囲む3人の人物。左のひとりが匙で液体をすくい上げています。皆が手を掲げる様子からは、それを指で取って口に含んだのであろうことが分かります。3人ともに眉根を寄せ、口をすぼめた表情から、口にした液体に思いのほか酸味があったことが読み取れます。この少しユーモラスな画題は、三酸図といつて、儒教・道教・仏教の三教一致の思想を表したものです。三教より蘇軾、黄庭堅、仏印禪師が描かれるのが通例で、蘇軾と黄庭堅が仏印を訪ねた際に皆で桃花酸という酢を口に、その酸っぱさに一様に顔をしかめた、という故事に基づいています。孔子、老子、釈迦の3人の姿で描かれることもあります。酸っぱい



紙本墨画 51.8 × 40.1cm

ものは皆等しく酸っぱいように、宗教や思想は違っても真理はひとつであるということを表現しています。

この画稿は、室町期狩野派の作品に同図様のものがあり、模本などから写されたと考えられます。また、禅宗的な画題のため、聖福寺など秋圃と交流があった禅寺に関連して制作されたのかもしれない。（日野綾子）

ひとこと
くずし字

【𤇀・穉】

猛暑が続いた夏が終わり、これから秋が深まる季節となります。「秋」という字は絵師齋藤秋圃の名前の一字ですが、今回は珍しい「秋」の字をご紹介します。

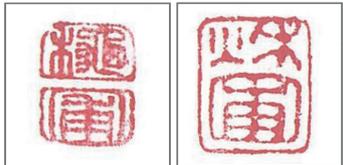


図2

図1

写真は秋圃が使用していた印章を捺印したもので、（図1）の1文字目は、左側が「火」、右側は「禾」で、「𤇀」という字になります。「𤇀」は「秋」と偏旁が左右入れ替わっていますが、読みも意味も同じです。2文字目は「圃」という字で「𤇀圃」と書いて「しゅうほ」と読みます。（図2）の二文字目は、左に「禾」、右に「龜」で「穉」となります。



2

1

《印章》 齋藤家資料 上部印面に対応

となり、これは「秋」の異体字です。二文字目は先ほどと同じく「圃」となり、こちらも「穉圃（しゅうほ）」となります。

秋圃の作品を見ると、図1の印は後年に、図2の印は早い時期に使用されているようです。署名についても、初期は「𤇀圃」、中後期からは「秋圃」が使用される傾向がみられます。

印章の使い分けや署名の変遷は、作品の真贋や制作時期を判断する材料のひとつになります。

（木村純也）